

中部小学校教育研究会一斉研修 特別支援教育研究部

研修テーマ

子どもの学びを支える支援のアイデア

～「できた!」「わかった!」が実感できる教材の活用を通して～

- 1 日 時 平成29年8月7日(月) 9:00～12:00
- 2 会 場 湯梨浜町立東郷小学校
- 3 講 師 福岡県飯塚市立飯塚小学校 教諭 杉本 陽子 先生
- 4 研修内容

子ども達の学びを支える支援の様々なアイデアを、書籍や講演会等で全国に伝えておられる杉本陽子先生を講師として招聘し、研修を実施した。

「読む」「書く」「話す」「数の概念」「九九」「不器用さ」への支援・対応について、実際に杉本先生が作成・活用しておられる教材を手に取り体験しながら学ぶことができた。

杉本先生は、子ども一人一人の学び方の特徴を捉え、今の姿(困難さ)にはこんな背景があるのではないかという「困難さの背景」を踏まえた指導をすることが、子ども達の学びやすさにつながり、学習への意欲に大きく関わるということを繰り返し伝えられた。そして、困っている子ども達への具体的な支援について、難しさを感じている指導者にとって参考になる指導のポイントを数多く提示していただいた。



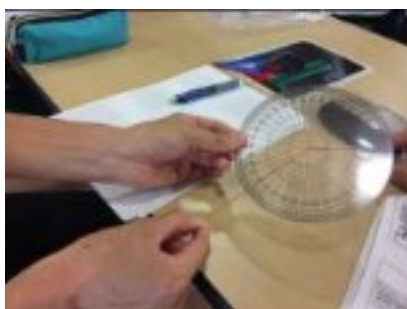
「読む」ことが苦手な子どもへの支援教材として、「ひらがなマッチングカード」「ひらがな学習プリント」「絵本の活用」「特殊音節の指導」を提案された。書くことにつなげるためにはまず、読める子どもにしていくことが出発点であり、見たことがある文字であることが書いてみたいという意欲につながる。表記と音のつながりを意識すること、興味のある語彙で関心を高めること、イラストで意味とのつながりを確認すること、そして自分で確認できる方法を知ること等、目や耳からの情報処理の困難さへのアプローチとして様々なアイデア教材を取り入れ、「読む」ことを楽しみながら学んでいける工夫を知ることができた。特に特殊音節を学ぶ工夫の一つである「拗音バスケット」では動作化を取り入れ、ゲームの見通しを持てる工夫、間違ったりわからなかったりしても意欲を保てる工夫を紹介され、参加者が実際に体験して学ぶ楽しさを味わうことができた。

次に「書く」ことへの支援である。片仮名の指導では、動作化や歌で確認することで、簡単に思い出せる工夫を紹介された。漢字の指導では、感覚を使ったり、歌で確認したり、正解と間違いとの違いに自分で気づいたりする方法を学んだ。また筆圧が弱い子へは、「強

く書いて！」と指導するよりも、自分で「ああ、弱いんだな」と気づき、指先の力の入れ方を知る教材を取り入れる方法があることを紹介された。また、書くことへ大きく関わる「見方、見え方」へのアプローチとして、飯塚小学校で取り組んでいるビジョントレーニングも学んだ。

「話す」ことへの支援として、「質問上手になろう！ゲーム」を体験した。物の名前を知り語彙を広げる一つの工夫である。

「数の概念」を育てる工夫として、数字、読み方、指のイラスト、ドット、物のイラスト等、様々なカードを準備し、数には様々な表し方があることを子どもがつかんでいける工夫をあげられた。「九九」の意味を知る手作り教材、指導者が個別指導をしなくても一人で確認できる九九の練習カードやその作り方も紹介された。



「不器用さ」が学習の困難さを招いている子ども達へは、三角定規や分度器、コンパスなど学習に頻繁に登場する学習用具を取り上げられ、ずれない、すべらない、うまく書ける補助具を提案された。また、低学年のうちからコンパスやリコーダーの運指につながる動きを遊びの中でトレーニングしていることも紹介された。

どの教材も、杉本先生が向き合ってきた子どもの「困難さの背景」に寄り添い、愛情深く接してつくり上げられた愛とアイデアあふれるものである。参加者は、教材を実際に手に取りながら学ぶことができ、具体的な子ども達の姿をすぐそこに思い浮かべることが出来る研修となった。講演終了後の参加者からは、「早く子ども達に会ってこんな支援をしてみたい」「子どもにより合った適切な方法のヒントを得た」等の感想が数多く寄せられた。その中で私たち参加者は、杉本先生の教材の数々から方策や方法を学ぶとともに、目の前の子どもの「困難さの背景」を分析し、よりよい支援を様々な角度から検証し、子どもに寄り添い、笑顔と自信が届けられるよう、より楽しくより適切で効果的な支援を考えることの大切さを学ぶことができた。

